

映画「ケアニン」上映会&加藤忠相氏講演会にボランティア参加して

映画「ケアニン」を観て、講演会に参加して、認知症への考え方が変わった。講義で学んだことがあり、徘徊をしてしまう、乱暴になるといった悪い症状ばかりがあるのではないことは知っていた。しかし、認知症の方が映画のように一見、認知症ではないような生活を送ることができることに驚いた。長期記憶は保たれやすいという認知症の特徴から、包丁を持ち、料理を作ることは当たり前だということがとても印象に残った。刃物を扱うことで何かがあった時を恐れ扱わない施設もあれば、しっかりとスタッフが見守ることを条件に料理を認知症の高齢者にしてもらう施設もある。このように危険を恐れすぎないようにすることで認知症の高齢者の持てる力を保つことができる。寝たきり高齢者が生まれるのは高齢者を寝かせきりにしている援助者に責任があることを学んでいたため、持てる力を生かす場面は日常生活では考えるとたくさんあると考えさせられた。認知症の症状として見当識障害がある。映画では、介護者のことをなかなか覚えることができていなかった。しかし、覚えられていないことに悲哀の感情を抱くのではなく、見当識障害があることをしっかりと踏まえて毎回毎回名乗っていた。そのように接することで、認知症の高齢者自身も安心してケアを受けることができているのではないかと考えた。認知症の高齢者をもつ家族は、見当識障害があることを受け入れられていなかったばかりに自分自身も傷つき、覚えていないことを高齢者へ強く当たってしまうことで、家族であるのに高齢者が自分自身のことを悪い人だと認識してしまっていた場面があった。家族にとってなかなか認知症になったことを受け入れることは難しい。しかし、そこを乗り越えることで自分自身にとっても認知症の高齢者自身にとっても過ごしやすい生活が待っている。認知症になったからといって家族のことを忘れてしまったわけではないことを家族が理解しておくことで、少しでも認知症になった高齢者を受け入れやすくなるかなと考えた。見当識障害によって同じ話をしたとしても、状況の異なる話をし始めたとしても、それを否定するのではなく相手に合わせて耳を傾けることがとても大切であることが分かった。看護師になるにあたって相手に合わせられるようになるべきで、そのように接せられるように技術を身に付けたいと強く思った。認知症の高齢者への接し方がきちんとなされており、持てる力を生かされている、このような施設で過ごす高齢者はとても生き生きして見えた。私自身の看護師としての在りたい姿を良い方向に改めることができた。

映画「ケアニン」上映会&加藤忠相氏講演会にボランティア参加して

映画「ケアニン」の上映会および加藤忠相氏講演会の受け付けのボランティアに参加させてもらい、映画や講演会を通してさまざまな学びがあった。

映画「ケアニン」は、介護がテーマだった。まだ介護福祉士になりきれていない新人の介護福祉士の目線で介護の場が描かれていることで、主人公の大森さんの感情が理解しやすいものだった。介護の場と聞くと、虐待など悪いニュースばかりが頭に浮かぶ。しかし悪いニュースしか取り上げられないだけで、実際介護の場はとても明るいところであることを知った。大森さんは介護福祉士としてさまざまな人と関わるうちに、対象との関わり方や人生について学び、日々成長していた。実際に介護の場に行き、対象と関わることでしか見えてこないことの方が多いと思った。また認知症家族の抱える問題もリアルだった。自分の母親が認知症であることを受け止められない、孝行できていないことを後悔してしまう、大切な人に自分のことを忘れられてしまうことが辛いなど、映画を見ていて涙が止まらなかった。どの病気も、家族の病気への理解が不可欠だと思う。そして一緒に病気と向き合うことが大切だと思う。介護福祉士という立場から対象に寄り添うことで対象の家族とも向き合い、対象と対象の家族まで支えることが必要だと思う。認知症になったからといって終わりではないとわたし自信強く感じた映画だった。

加藤忠相氏の講演会は、私にとってとても刺激となるものが多かった。何より加藤氏の考え方が素敵だった。加藤氏は徘徊をする人が多くて困っている他の施設に対して、「あなたのことが嫌いか、あなたの施設にいたくないか」と考えていた。「対象が、ここにいたい、ここは自分の居場所だと思える施設なら対象が出て行くことはない」と述べていて、確かになと思った。対象も、もちろん人間である。つまらない場所に何時間もいられない私たちと同じだということがなぜわからないのか、自分もわかっていなかった。加藤氏は対象の興味を引くものを探し、「この施設にいたい」と思わせていた。また、対象のことを一番よく理解しているのは担当の介護福祉士だと言い、各々が思う介護を自由にさせていた。「介護は、その人を縛るものではなく、その人の人生を支える、お手伝いするもの」という加藤氏の話聞いて感動した。

今回このボランティアに参加できて、本当に良かったと思う。自分自身の刺激になり、看護に携わりたい私にとって大きな学びとなった。ありがとうございました。

映画「ケアニン」上映会&加藤忠相氏講演会にボランティア参加して

私が今回ケアニン上映会&加藤忠相氏講演会のボランティア活動に参加しようと思ったのは、友だちに参加しようと言われたからである。誘われた当初は、ボランティア活動の日にちがテスト期間だったこともあり、あまり気が乗らなかった。しかし、実際にボランティア活動に参加して得られたものが多くあった。

映画の介護福祉士の大森さんは最初、施設の方がみんなで体操をしてもどこか恥ずかしそうにそれを見ていて、高齢者とも上手くコミュニケーションをとれていない様子だった。その様子がフィールド体験実習中の自分とどこか重なった。私も実習で訪問看護を利用されている利用者さんのお宅に訪問した際、一緒に体操をしたが、体操をすることを恥ずかしく思う自分がいて真剣に取り組むことができなかった。また、利用者さんになんでも聞いてね、と言っていたにも関わらず、頭が真っ白になり、なにを聞けば良いかわからず上手くコミュニケーションをとることができなかった。このような自分の姿が大森さんと重なり、彼がこれからどのように高齢者や職員の方々とかわっていくのかに注目して上映会を見た。最初のうちはケアニンとして介護をするというより、受動的に介護をさせられているような印象を受けた。しかし、星川さんと出会い、彼女とのかかわりを通して彼の介護という仕事に対する態度が変化していったように感じた。なにが彼の意識を変化させたのかを考えると星川さんをメインで担当することになったことで、その人のことをより知ろうという姿勢ができていったことが関係しているのではないかと感じた。それによって、現在の星川さんだけではなく星川さんがどのような生活の過程を経てきたのかを知ることができ、星川さんによい介護を提供したいという思いにつながったのではないかと考えた。このように、相手を知ろうとする姿勢は看護をする上でも大切な姿勢だと感じる。その人の生活の過程を知ることによってその人の食習慣や運動習慣、家庭環境を知ることができ、なぜその疾患に陥ったのかを考えることができる。それが明らかになることで、その人がこれから疾患を治療したり、ともに歩いていくための看護を提供することができると感じる。このように、今回のケアニンの上映会を通して、看護をしていく上でその人のことを知る事の大切さをあらためて感じる事ができた。また、その人の持つ力をどれだけ活かすことができるかを考えた看護をしていくことがその人のQOLを高めていくことにつながるということがわかった。

映画「ケアニン」上映会&加藤忠相氏講演会にボランティア参加して

今回、「ケアニン」を見ながらもし自分が大森圭だったらどのようなケアが対象の方にできるだろうと考えた。しかし、「ケアニン」を見始めたときは働き始めたばかりの大森圭と一緒に上手にコミュニケーションが取れず、対象の方や家族の方々が満足いくようなケアをするのは私には難しいだろうと感じていた。大森圭が働くことになった小規模介護施設では、多くの認知症の方がいた。「ケアニン」を見進めていくと認知症とひとくくりにしても、症状は一人一人異なっており、それぞれの対象の方の良さがあると感じさせられた。私が「ケアニン」で最も印象に残った場面がある。それは、敬子先生が亡くなった後に「おおもりけいさんしんせつ」という敬子先生のメモを家族が大森圭に渡し、敬子先生の家族が大森圭に「あなたでよかった」という場面である。「あなたでよかった」という言葉は敬子先生の言葉を代弁しているようにも感じた。敬子先生を取り巻く家族の苦悩や、葛藤を家族の力や周りの人々のサポートを受け、乗り越えたからこそ出てきた言葉だと感じ胸が熱くなった。人に携わる仕事をするうえで感謝されることはやりがいにつながり、忘れられないほど嬉しいものであるとあらためて思った。また、私自身も対象の方や家族の方が「あなたが担当でよかった」と思ってくださるようなケアを提供できるような医療従事者になりたいと思った。また、講演会の中で「徘徊も介護スタッフと一緒に散歩」という言葉があった。認知症がどのような疾患かを学んだつもりだったが、どの症状もマイナスなイメージを感じていた。しかし、このように考えることでプラスのイメージに変換された。私もこのような考え方ができるようになりたいと思った。

「ケアニン」を見始めた時は対象の方と上手くコミュニケーションをとれるか不安という気持ちがあった。しかし、「ケアニン」を見て講演会に参加した今、上手くコミュニケーションをとれるか分からないが、対象の方や家族と関わりたいと感じることができるようになった。また、「ケアニン」を見て感じたこと、学んだことを生かしていけるように学生のうちから対象の方の育ってきた環境や、好きな食べ物などの社会関係に着目し、対象の方の特殊性を見つけ出し、それを踏まえたうえでその人に合ったケアをすることを意識しようと思った。そして将来立派な「ケアニン」になれるように努力していきたいと思った。

映画「ケアニン」上映会&加藤忠相氏講演会にボランティア参加して

今回は、ボランティアや、上映会と貴重な講演会にまで参加させていただきありがとうございました。

映画のほうでは、介護福祉士の方が認知症の方との関わりを経て、その人らしく最後まで生きるにはどうしたらいいのだろうと、私たち学生にも通じるところがあり、感動の中にも学べるものがたくさんありました。私の祖母は、認知症になってしまって、入院し、最後まで寝たきりの状態で、言葉を交わすこともできませんでした。しかし、映画の認知症の方は、息子のことも認識できず、病気の残酷さを痛感させる場面がいくつもありましたが、最後まで表情は笑顔で、とても生き生きとしていました。一方で私の祖母は、外に出ると危ないから、とって一日中家にいる状態で、監視されているような状態だったのかもしれない。家の中で転んでしまい骨折したときは、病院が安全だと判断しそのまま入院しました。足が治ってから家にもいた時までは歩いていた祖母が、すぐに寝たきりになってしまい、話せなくなる状態にまで変わってしまいました。映画の方は、介護福祉士や息子夫婦に見守られながら、自分のやりたいことをやったり、一般的にいう、徘徊行為をしてしまった時すぐさま介護福祉士がついて行って、これは徘徊ではないのです、お散歩なのです、と言っていたことがとても印象的でした。私の祖母が家から出たときに、どうして祖母の気持ちも確認せずすぐに家に連れ戻したりなんかしてしまったのだろうと、心が痛くなりました。祖母が外に出て歩こうとしたり、料理をしようとしたら、しっかり家族全員で見守ってあげることができていたら、祖母は生き生きと笑顔で過ごすことができたのではないかと切ない気持ちになりました。

認知症になっても全部を忘れてしまうわけではなく、その人が長年かけて培ってきたことは決して認知症に負けたりなんかしないという事が強く印象に残りました。私の祖母は、七人の子供を育て上げた人で、祖母が急に料理をしようとしたらする姿を今考えてみれば、祖母の記憶の中に忘れられずに残っていることの一つであるのに、それを私たちが認知症だからと縛り付けて、できなくさせてしまったのではないかと感じます。映画上映会や、講演会を通して、祖母のことが思い起こされて、後悔の気持ちがつのりしましたが、その人の生きてきた人生からその人らしさを考えたり、やりたがっていることを尊重して、私たちケアする立場の人間がそれをしっかりと支えてあげたり…そのような関わりが重要になるのではないかと考えました。認知症だから、という理由で押さえつけてしまうのは、かえってその人の生命力を急激に脅かしてしまうことになるのだと実感することができました。認知症になってしまったって、その人が、その人らしく生きることができれば、病気なんて感じさせないくらい幸せに生きていくことができるのだと、認知症に対してポジティブな見方を持つことができ、本当に映画や講演会の話をお聴くことができて良かったです。今後の自分自身のことでも考えて、このような講演会や事業に積極的に参加していきたいと思う本当に良い機会を与えていただきました。ありがとうございました。